

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：30102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01677

研究課題名(和文) 植民地朝鮮における総力戦体制下の身体管理政策に関する研究

研究課題名(英文) a study on the body and health management policies in colonial Korea

研究代表者

金 誠 (KIN, Makoto)

札幌大学・地域共創学群・教授

研究者番号：40453245

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は植民地朝鮮における1940年代の総力戦体制期に着目し、人的資源として朝鮮人を動員していくときに、どのような身体管理政策がなされたのか、その実態を明らかにすることを目的とした。1940年代、植民地朝鮮における都市部では国民総力朝鮮連盟の奨励した身体活動、とりわけ厚生運動や健民運動が実施されており、農村部においては社会事業政策として健全娯楽が振興されている。これらの実態を明らかにしていくことで統治主体者が身体管理政策によって意図した動員との関係を読み解き、さらに1945年に植民地朝鮮において施行された「朝鮮体力令」について考察を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は「身体」を研究の対象とする体育・スポーツ史の領域に止まらず、朝鮮半島の植民地研究そのものにも貢献できる点が挙げられる。また植民地期の動員に関わる研究であることから、現代において常に問題化する日韓の歴史問題に対しても一定の貢献が予想される。日韓の歴史問題は常に政治史や外交史において争点となっているが、これまでの研究では文化的側面からの研究の蓄積はほとんどないため本研究が両国の歴史問題における新たな視座を与える研究のひとつになることが期待される。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the period of total war in the 1940s in colonial Korea, and clarifies what kind of management policy of human body was taken when mobilizing Koreans as human resources.

In the 1940s, in the urban areas of colonial Korea, physical activities encouraged by Kokumin Souryoku chosen Renmei, especially the welfare movement and the healthy movement, were carried out, and in the rural areas, entertainment was promoted as a social policy. By clarifying these facts, we tried to understand the relationship with the mobilization intended by the governing body by the management policy of human body, and further consider the "Chosen Tairyoku Rei" enforced in colonial Korea in 1945.

研究分野：スポーツ史 朝鮮近代史

キーワード：植民地朝鮮 身体管理 総力戦体制

1. 研究開始当初の背景

著者はこれまで朝鮮半島における植民地主義とスポーツの関係について継続して研究を進めてきた。近年は1920年代～1930年代の植民地朝鮮における「植民地近代」の問題に着目し、当該期における朝鮮人民族主義者やスポーツ関係者らのナショナリズムと近代性の問題が相関しながらスポーツが展開してきたことを明らかにした[金2009、2010、2013、2015]。また次に朝鮮人民族主義者や朝鮮人スポーツ選手の対日協力をどのように説明できるかに焦点を当て、彼らの対日協力行為を説明するときに植民地権力の暴力性だけに着目するのではなく、当該期の民族主義者らの価値観や朝鮮人スポーツ選手の国際スポーツ参加の意義が結果的に植民地権力に符合していったことを見出す研究を行ってきた[金2016]。本研究課題はこれまでの研究のなかで体系的に触れることができなかった総力戦体制期に着目する。

2. 研究の目的

本研究は植民地朝鮮における1940年代の総力戦体制期に着目し、人的資源として朝鮮人を動員していくときに、どのような身体管理政策がなされたのか、その実態を明らかにすることを目的とする。

1940年代、植民地朝鮮における都市部では国民総力朝鮮連盟の奨励した身体活動、とりわけ厚生運動や健民運動が実施されており、農村部においては社会事業政策として健全娯楽が振興されている。これらの実態を明らかにしていくことで統治主体者が身体管理政策によって意図した動員との関係を読み解き、さらに1945年に植民地朝鮮において施行された「朝鮮体力令」について考察を試みる。

3. 研究の方法

植民地朝鮮における総力戦体制期の身体管理政策に関する関連年表を作成したうえで、国内では国立国会図書館を中心に朝鮮半島における身体管理に関わる史料調査・収集を行い、韓国では朝鮮総督府所蔵資料や京城帝国大学図書館に所蔵されていた史料調査を行う。これらの作業により集まったデータを整理しながら、総力戦体制期における朝鮮人の身体がどのように管理されていたのか、その身体管理政策の実態を明らかにしていく。

4. 研究成果

「身体」という視角から植民地朝鮮を鳥瞰するとき、一九三〇年代はオリンピックなどの国際的なスポーツ大会に日本代表として朝鮮人選手が選出されるようになり、一九三六年のベルリン五輪には七名の朝鮮人選手が日本代表として参加している。なかでもマラソンに出場した孫基禎選手は金メダルを獲得し、南昇龍選手が銅メダルを獲得するなど、朝鮮人選手の活躍する身体は民族の優秀性を表象するものとして朝鮮知識人、朝鮮民衆に歓迎され、民族のナショナリズムを高めることに寄与してもいた。ところがこうしたスポーツ状況は皇民化政策を推し進め、朝鮮人を戦時の人的資源として配置したい総督府にとって望ましいものではなく、一九三九年三月に開催された「国防と体育に関する座談会」では、学務局長の塩原によってスポーツは否定され、植民地朝鮮では戦力のための体育が要請されたのであった。

一九三六年に朝鮮総督に就任した南次郎は政策目標の一つに朝鮮での徴兵制の施行を掲げていた。そのための試金石として一九三八年四月、陸軍において朝鮮人志願兵制度が実施される。

朝鮮人志願兵が入所した陸軍兵志願者訓練所では志願兵の身体と精神を日本人兵士と同様の

ものにするための規律訓練が施されていた。宮城遙拝、皇国臣民の誓詞斉唱、「海行かば」の斉唱、皇国臣民体操の実施など、朝鮮人志願兵らが共有する空間のなかで一連の所作が全体で繰り返され、皇民化の徹底が図られたのであった。これら以外にも精神教育として行われる講話では日本の武士道精神と通底する朝鮮民族の軍事性を担保した精神性が紹介される。それが当時の民俗学者らによって研究の進んでいた新羅時代の花郎のなかに見出された精神性であり、この精神性と態度が日本の武士道と結び付けられた花郎道＝朝鮮武士道として語られたのであった。

また一方で、朝鮮半島における娯楽は農村振興運動以来、管理される対象となっており、総力戦体制の下での娯楽は、都市部においても農村部においても、時局の認識が反映されつつ、統治と管理のなかで振興が図られていった。国民総力運動のなかの娯楽は国民総力朝鮮連盟のなかに文化部が組織され、文化部を中心に展開されていったが、それも一九四三年には組織が改組していくなかで娯楽そのものを管理するセクターは縮小されている。



『朝鮮日報』一九三八年七月一日

農村部を中心とした「娯楽」の問題に着目して総力戦体制へと向かう朝鮮半島を見たとき、この時期のいわゆる「内鮮一体」を志向する政策とのギャップの大きさに気づく。神社参拝の強要、創氏改名、徴兵制の施行といった正に「内鮮一体」を具現化し、日本人への同化政策を強力に推し進めようとした政策とは異なり、「娯楽」を媒介とした統治の方法は朝鮮の文化や習俗あるいは朝鮮人の伝統的な生活を緻密に調査・分析したうえで農村部に暮らす多数の朝鮮人を管理しうる存在へと位置付けようとしたのであった。その目的が総力戦体制下の労務動員や生産拡充にあったことは言を俟たないが、「内鮮一体」の理想と内実とのズレを「娯楽」の振興問題は垣間見させてくれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 金誠	4. 巻 98
2. 論文標題 総力戦体制における人的資源としての朝鮮民衆—スポーツの否定と兵的動員の正当化へ—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 民衆史研究	6. 最初と最後の頁 37-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/7932450	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金誠	4. 巻 第46号
2. 論文標題 植民地朝鮮における総力戦体制のなかの「娯楽」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 札幌大学総合論叢	6. 最初と最後の頁 23-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金誠
2. 発表標題 帝国日本のスポーツと民族の「融和」
3. 学会等名 東アジア近代史学会シンポジウム「スポーツと東アジア—国家/民族、民衆/大衆」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金誠
2. 発表標題 つくられた英雄たちと総力戦
3. 学会等名 「メディアと東アジア」研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金誠
2. 発表標題 「朝鮮神宮競技大会と植民地空間」
3. 学会等名 明治神宮国際神道文化研究所公開学術シンポジウム「帝国日本のスポーツと明治神宮 幻の東京オリンピック前後」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中悟・金誠
2. 発表標題 「朝鮮半島における軍人顕彰=ロールモデル化の系譜 李仁錫・朴珍景をめぐって」
3. 学会等名 「宗教と社会」学会第25回学術大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関